

ぼくの妹に

ぼくは四年生になるまで一人っ子でした。友達が兄弟の話をするたびに、兄弟がほしいと
思っていました。そんな日は決まって家に帰ると、
「妹か弟ができないかなあ。うーんとやさしくするのになあ……。」
と言っては、お母さんをこまらせました。

そのぼくに、兄弟ができたのです。けれども、お母さんは体が弱く、妹をうむときに、命
があぶないかもしれないということでした。でもお母さんは、
「せっかくさずかった命を大切にしたい。」
と言ってうむことを決めました。病院の先生も、無事に赤ちゃんがうまれるようにじゅんぴ
をしてくださいました。

そして、待ちに待った妹が生まれました。でも、ぼくは、妹が生まれた日も、その次の日
もそのまた次の日も妹に会うことができませんでした。
「なぜ妹に会いに行っちゃだめなの。」
ぼくはお父さんに聞きました。お父さんは、
「とっても小さく生まれたから、まだひろきは会えないんだよ。」
と言いました。

妹は「みすず」と名付けられました。妹が生まれて五日目めに、ようやく妹に会うことが
できました。保育器の中の妹は、二本のチューブをつけていました。
「どうしてみすずは、目を開けないの。」
ぼくが心配になってお母さんに聞くと、お母さんはなみだをためて言いました。
「みすずは、保育器の中でがんばって生きているのよ。きっと元気になるわ。」
妹はおなかの病気で、食べ物にも注意して生活しなければなりません。ぼくは、
(兄として、みすずのためにできることは何でもやろう。)
と心の中で決めました。

みすずは生まれてから半年たって退院しました。
「ひろきはお兄ちゃんなんだから、みすずをよろしくね。」
と、お母さんが言いました。ぼくは、兄としてみすずの世話をがんばろうとやる気まんまん
でした。

みすずは、毎日ねてばかりでした。目を開けているときでも、お母さんだけにしか笑顔を見せません。いくらぼくがあやしても、あまり笑わないのです。みすずが生まれてからは、お母さんはみすずにつきっきりで、ぼくのことをあまりかまってくれません。

（きっとお母さんは、ぼくよりみすずの方が大切なんだ。）

ぼくは、やきもちをやくようになりました。

ある日、ぼくは、お母さんから妹にふとんをかけるようにたのまれました。

（今はまだ暑いから、もう少ししてからふとんをかけてあげよう。）

ぼくはそう思って、すぐにふとんをかけませんでした。その日、お母さんはとてもいそがしく、いつものようには妹の世話ができなかったのです。

しばらくして、ぼくは妹にふとんをかけわすれていたことに気付きました。つい、テレビに夢中になって、日がしずんだことに気付かなかったのです。そのとき、妹が泣き出しました。買い物から帰ってきたお母さんがかけつけてきました。

「ひろき、みすずにふとんをかけてったのんでおいたのに、どうしたの。」

「たのまれたときは暑くて、もう少し後でと思ったら、わすれちゃったんだ……。」

と、ぼくは答えると、お母さんは言いました。

「みすずは、少しのことでもおなかをこわしてしまうのよ。お兄ちゃんなんだから、病気のみすずちゃんを大切にね。」

ぼくは「お兄ちゃんだから」と言われるのがいやになっていました。

泣きつづけるみすずを病院へつれて行くことになりました。ぼくも車に乗り、お母さんと妹と病院までいっしょに行きました。お母さんと妹が応急処置室に入りました。どれくらいの時間がたったのでしょうか。十分ぐらいだったかもしれません。でも、ぼくにはとても長く感じられました。ようやく妹の手当てが終わり、お母さんが先生と出てきました。

ぼくは泣きながらかけよって妹にあやまりました。その様子を見ていた先生が、しずかにおっしゃいました。

「わたしも、きみと同じ年ぐらいのときに弟が生まれてさみしい思いをした。でも弟が交通事故でなくなったときは、言葉にできないくらい悲しかったよ。」

ぼくのむねがじいんとあつくなりました。

「みすずのためには思ってたんです。苦しめるなんて思ってもいなかったんです。」

「分かっているよ。ただ病気の妹さんは、しっかり見守らないとね。」

「先生、ごめんなさい。」

「五才だったきみがけがをしたときも、お母さんはとても心配して病院にかけつけてきたんだよ。」

病院の先生の言葉を聞いて、ぼくはあらためて命について考えました。